

昭和四十七年、辰巳会会長高畑誠一氏は日本経済新聞『私の履歴書』に十月十五日から二十六日に亘り掲載される。翌四十八年六月に単行本『私の履歴書』第四十八集が発行され、読者評として高畑氏は、「戦前の商社マンの活躍ぶりが面白く、記録的にも貴重なものがありますが、本業外の日本ゴルフ界草分けとしての秘話が評判になりました」と記されている、高畑会長八十五歳の時である。

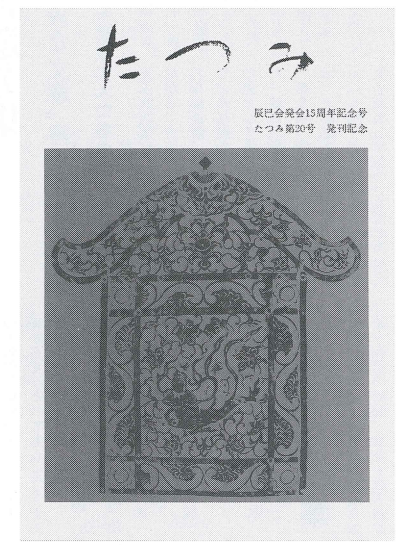


(第18号)



(第19号)

昭和四十九年一月二十一日の新年例会は金子直吉翁三十年祭として生田神社会館で執り行われる。『たつみ』二十一号の記述には「この会場で今日しも金子直吉翁の三十年祭を執行するのである。金子さんは春まだ浅い二月十九日に御逝去になつたのであるが辰巳会はこれを取り越して今日の主題として、新初会合の例会に大きな意義を持つ事になった。朝方から少し白いものが散らつき出した様だが、寒さものかわ元氣一ぱいの諸氏が続々と到着された温かさが其処彼処で湧き上る――」。



(第20号)

辰巳会は創立から十五周年を迎える。同年八月に会員名簿が作成されたが、正会員の人数が昭和四十二年名簿の六百六十四名をピークとして、昭和四十六年六百十八名、今回は五百五十七名に年とともに減少している。神鋼社長井上義海氏は「――神戸製鋼所は、明治三十八年九月一日、神戸脇浜においてささやかな鍛造工場として弧弧の声をあげたのですが、爾来七十年、幾多の風雲に耐えて

幸いにして今日、我国代表的な重工業メーカーとしての地歩を築くに至ったのであります。今日の当社の姿を思うにつけ、七十年の歴史の礎となられた多くの先輩諸兄、そして当社に対し有形無形のご支援を賜りました関係各位に対し衷心から感謝の意を表するものであります」。この様に述べている。

昭和四十九年一月の新年例会は、金子直吉翁の三十年霊祭として神戸生田神社会館で執り行われる。この例会に十年振りに出席している帝人社長大屋晋三氏について、たつみ二十一号の記述には「――略――さて、何と云つても本日の庄巻は、帝人社長大屋さんの出慮であろう。如何に日頃お忙しいかが判る昨年十一月イランの最高勲章を受けられ年末ぎりぎりに帰朝されて直後、金子翁の年祭を聞いて馳せ参じて下さったのである。御受章を御祝いしてささやかな花束を御贈呈申上げたが満場の拍手を浴びて予期せられないハプニングに流石の大屋さんも些が面映ゆげなたじろぎを見せられた。尤もこのイラン人最高

勲章については週刊誌が政子夫人の内助の大活躍をユーモアまじりに書き立てて石油合弁事業の貢献度は半分以上夫人の功績

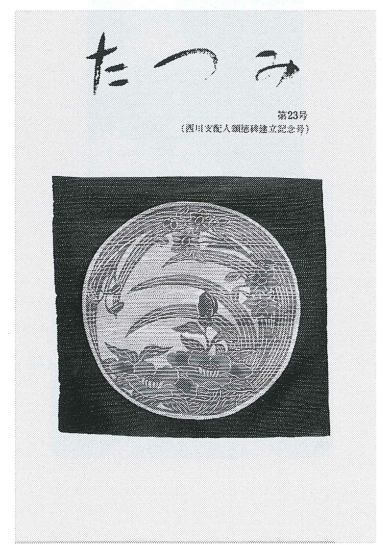


(第22号)

にあり実質的には婦人が受章されてもおかしくない等と書き立てたエピソードがある。――以下省略――。大屋社長は婦人の内

(四) 辰巳会創立十五周年

昭和五十年五月十五日、全国大会は神戸祥龍寺で開催する。辰巳会創立十五周年にあたる。周年の記念事業が一年前に発案



(第23号)



祥龍寺・菅宗信禪師

され、本部幹事木畑龍治郎氏は『たつみ』第二十三号の頌徳碑建設始末記の冒頭に「昭和四十九年六月二日、本半月例幹事会の席上に於いて、予々懸案になつて居た十五周年記念事業の実施について柳田義

一氏提案の、『西川文蔵氏の頌徳碑』建設案が討議され、出席幹事全員の賛意を以つて決定、実現に踏み切る事になる」。一年後、昭和五十年五月十五日、全国大会開催の同日、祥龍寺境内に建立された鈴木商店支配人西川文蔵氏の頌徳碑除幕式が会員百七十名参列のもとに行われる。

六甲の山並みを背景とする祥龍寺には、鈴木よね刀自の御像、金子直吉翁・柳田富士松翁の頌徳碑に並び、西川文蔵氏の頌徳碑の建立は史実鈴木商店を後世に伝える意義は大きい。

辰巳会は創立十五周年を過ぎた昭和五十一年に会員の動向調査が行われ、『たつみ』第二十五号によると正会員五百四人、

昭和二年の挨拶状

鳴内 義治

此の手紙は五十年前鈴木商店の際も焼く事なく今日迄温存して全社員が受取った感銘の手紙である。来たものである。五十年後の今日。当時私は満二十二才の若造、皆様と共に今一度此の手紙を見て其の若造迄此の行届いた手紙を下。鈴木時代の感銘を新に致し度く敢さつた労務管理のあり方を肝に銘。えて「たつみ」に寄せた次第です。昭和九年函館大火で家財全焼

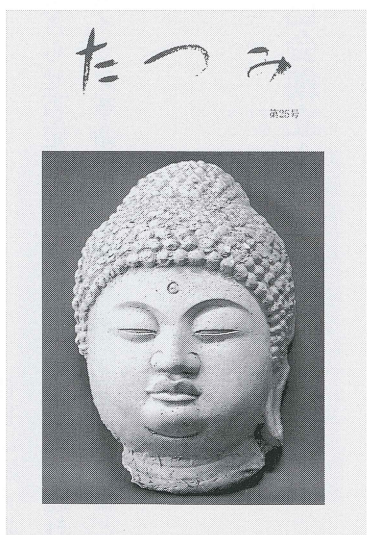
多年職員御一同ノ奮勵努力ニ依リ店運ノ隆昌ヲ見休戚ヲ共ニシテ今日ニ至リタル我鈴木商店モ輓近種々ノ事情ニ因リ事志ト違ヒ善處策盡キテ店情困頓ニ陥リ候結果今回一先休業ノ上一大整理ヲ爲スノ止ムヲ得サルコト、相成候爲メ遺憾ナガラ御一同ニ對シ別途通達ノ通り其ノ御身分ヲ無給休職ト爲スノ外ナキニ至リ候次第苦衷御諒察不惡御承引被下度候尤モ追テ整理成リ復興ノ緒ニ就キタル上ハ又復御一同ノ御盡力ニ待ツヘキモノ多カルヘシト被存候故其節ハ更メテ御通知可申上ニ付是亦御承知置被下度尚此機ニ於テ年來ノ一方ナラサル御勤勞ヲ感謝スルト共ニ御一同ノ御健康ヲ切禱致候 敬具

鈴木合名會社
代表社員 鈴木よね
株式會社鈴木商店
社長 鈴木よね
殿

昭和五十二年五月十二日、全国大会が国立京都国際會館において開催される。この大会は「鈴木商店回顧五十周年」を記念するものであり、出席者は本部をはじめ東京、北海道、中部、四国、九州の各支部から二百十名に余る多数であった。五十年を回顧して西川政一氏（日商岩井(株)相談役）はフェニックス



(第24号)

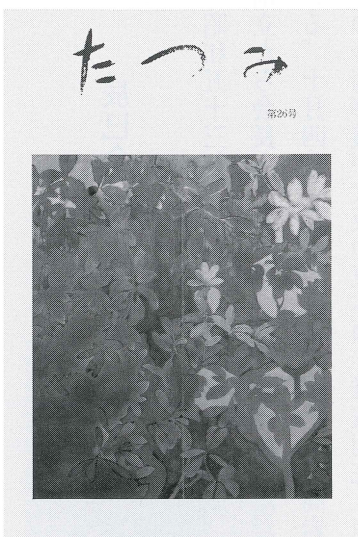


(第25号)

平均年齢七十六歳である。この年齢分布には最年少者が大正十三年生、五十二歳の会員がいるが、鈴木商店時代あるいはその関連企業に勤務されたと思われる会員が全体の九・八割、平均年齢八十歳であったと思われる。

鳴内義治氏（羽幌炭砒鉄道(株)）は昭和五十年十月に永眠された。同氏が鈴木商店最後として社員に出された挨拶状の内容を『たつみ』に載せている。

鈴木と題して「アノ日、アノ時、忘れんとして忘れ得ないあの最後の鈴木蹉跎の報！それから五十年、思えば春風秋雨の変転極りなき半世紀であり、鈴木が残党が『回顧五十年』の夢を強調し、夢よもう一度と絶叫するの無理からぬことでした。——中省略——我々はここでただ徒に回顧の夢を追い「懐かしさ」と「思い出」にふけるのみではいけない。どうすればこの回顧を生命あるもの、そして次の時代を朗らかに澁刺たるものに済



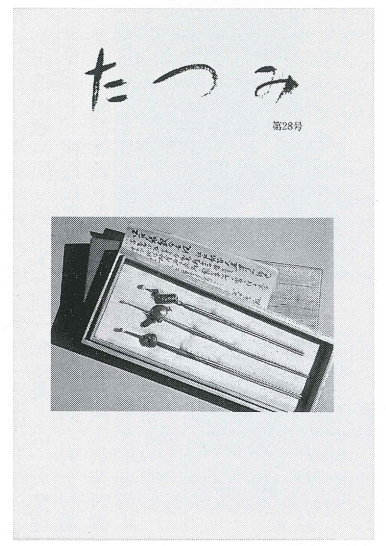
(第26号)



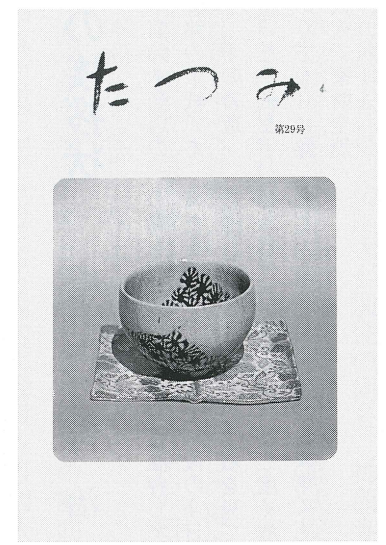
(第27号)

し得るか：真剣に考え、考え、考え抜かねばならぬと思うのです。——中省略——絶対に『一将成つて万骨枯る』の愚を繰り返してはならぬと強く強く思うのです」と、回顧して思いを記している。

昭和五十三年の全国大会は五月十一日、京都東山の太雲院南溪園で開催される。会長高畑誠一氏は九十一歳の高齢になられ、幹事柳田義一氏にメッセージを託され「今日の全国大会御盛會



(第28号)



(第29号)

のことと悦んで居ります。親しく皆様の御慧眼に接し度く愉しんでおりましたところ健康の都合上やむにやまれず失礼申し上げます。何卒御来場の皆様におかれましてもお身体を大切に何時何時迄もこの会を盛りあげて下さるよう御願申し上げます高畑」。

鈴木商店の歴史は、この当時の経済状況から注目されるところとなり、当会場にはNHK大塚記者（その後辰巳会例会の出席の縁になる）一行が取材に訪れる。

辰巳会会長 高畑誠一氏逝去

昭和五十三年九月十九日逝去、九十一歳。高畑会長は辰巳会創立から会長をされ会員の拠り所であっただけに淋しさがつたわ。十月四日、高畑会長が関係する日商岩井株、太陽鋳工株等の合同葬儀が大阪の東本願寺難波別院（南御堂）で挙行される。『たつみ』発刊第三十号記念号には次のことが掲載されている。

日本経済新聞（昭和五十三年十月二十四日）
つどう関西の経済人
栄光をしのぶ 心に生きる鈴木商店
——略——十月四日、大阪市南区の東本願寺難波別院（南

御堂）で挙行された高畑の葬儀には多くの財界人にまじって、全国から高畑に最後の別れを告げに集った「辰巳（たつみ）会」会員の年老いた姿が目をついた。おそらくこの人たちにも、高畑と苦楽を共にした鈴木商店時代および鈴木商店倒産後の波乱に富んだ人生のことが脳裏をよぎったことだろう。

弔辞 辰巳会幹事代表 大幡久一

——略——本会発足以来満十八年もの長いながい間大変お忙しい中を会長として全責任を背負っていただきました。発会式の日に言われました「会のことについては自分が責任を持つ」という御言葉は今も私の脳裡に深く刻まれております。本会が今日こんな立派な姿であるということは、高畑さん、あなたが会長であられたことによるものとは私は信じて疑いません。全会員もそうだろうと思います。重ねて厚く厚く御礼申し上げます。——略——

高畑会長の後継には鈴木商店初代鈴木岩治郎より三代目に当たる太陽鋳工株社長鈴木治雄氏が継ぐ。



(第30号)



(第31号)

辰巳会会員 長寿番付

相撲の力士番付表になぞられて辰巳会会員の長寿を祝い、長寿番付表を『たつみ』に掲載が始まるのが昭和四十七年一月発行の第十六号である。昭和五十五年、辰巳会創立二十年時の長寿番付表と次頁に並べてみる。

